《論　文》

『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』所収の符号仮名(5)

山村　敏江

はじめに

神田外語大学神田佐野文庫所蔵『日本広東学習新語書』について、共同研究プロジェクトとして音韻面・語彙面の研究が進められている。本稿では、山村2019・2020・2021・2022に引き続き、臨時台湾戸口調査部による『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』及び台湾総督府による『広東語辞典』を比較対象として使用する。最終的には、これらの資料に使われる仮名表記（符号仮名[1]）・字音体系の整理を通じて全面的な比較を目指す。

本稿では、上記三点の資料に使われる仮名表記の一部を、台湾客家語の二大勢力とされる四県音・海陸音の字音に基づき分類、考察を行うこととする。

なお、『日本広東学習新語書』（以下『新語書』）、『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』（以下『用語（広東語）』）については山村2019、『広東語辞典』の概要については山村2021に述べたところであるため、本稿では省略する。

1．台湾客家語とカタカナによる音注

日本統治期の台湾では、台湾語（ホーロー語[2]）や「広東語[3]」（客家語）を学習する日本人のための仮名表記（符号仮名）が作成され、これらを使用した学習書や辞書が刊行された。

この仮名表記はカタカナを利用したものだが、そもそも言語的に別系統にあるホーロー語・客家語音を、日本語を表記するための仮名で表そうとすれば、様々な問題が生じるのは想像に難くない。結局、仮名のみではその実際の音を

表しきれないため、補助記号を付すなど様々な方法でこの問題の解決が試みられた。

以下、『広東語辞典』の凡例に記載のあるもの、あるいはこれまでの考察によって得られた、『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』における仮名表記の概要について述べる。

① ts-（無声歯茎閉鎖摩擦音）

『辞典』には符号字と呼ばれるものがある。そのうち、「サ̄」「セ̄」「ソ̄」「チ̄」「ツ̄」は凡例によればそれぞれ「ツァ(tsa)　ツェ(tse)　ツォ(tso)　ティ(ti)　トゥ(tu)ノ如ク發音セラル」とある[4]。

② -i（非円唇中舌狭母音）

『辞典』には、①以外に更に符号字「ウ̄」がある。凡例に「ウ̄ハ唇ヲ扁平ニシテ發音スル一種ノウノ音ヲ表ハス。」とあることから、「ウ̄」は -i（非円唇中舌狭母音）を表すと考えられる。

『新語書』・『用語』にはこの種の補助記号は見られず、基本的にウ段で表記される。

③有気音

『辞典』には「ツ̣」のように、閉鎖音や閉鎖摩擦音の下に「・」という補助記号を付けたものがある。凡例では「出氣音符號」とされるものである。「出氣音ハ　カハア(kha)　キヒイ(khi)　等ノ如ク常ニハ行音ヲ伴ヒテ發音セラル。」と説明されることから、これが有気音を意味することが分かる。

また、『用語』にも同様の補助記号が見られる。『用語』には凡例はないが、用例から有気音を表すものと判断できる。『新語書』にはこの種の補助記号は見られない。

④韻尾 -m・-n・-ŋ

韻尾 -m については、三者全てで基本的に「－ム」と表記される。

韻尾 -n・-ŋ については、『新語書』では共に「－ン」と表記される。『用語』では、原則として -n は「－ヌ」、-ŋ は「－ン」と表記されるが、実際には多少の混同が見られる。『辞典』では、-n は「－ヌ」、-ŋ は「－ン」である。

⑤韻尾 -p・-t・-k

入声の表記については、一律に「－ッ」を用いるものと、-p・-t・-k をそれぞれ「－プ」「－ッ」「－ク」と表記するものに分かれる。『新語書』では基

本的に -p は「－プ」、-t・-k は「－ッ」で表記され、『辞典』では「－ㇷ゚」「－ッ」「－ㇰ」と表記される。

『用語』では、基本的に「－プ」「－ツ」「－ク」と表記されるが、実際には -k を「－ツ」で表記する等、多少の混同が見られる。

2．舌上音・正歯三等音字の仮名転写

山村2021では、『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』における蟹摂・止摂・遇摂の舌音・歯音字の仮名表記について考察を行った。その結果、上記の摂の舌上音・正歯三等音字については、『新語書』・『広東語辞典』が海陸音の字音を反映する資料であることが明らかになった。そこで本稿では、分析対象を舌上音・正歯三等音字全体に広げ、より明確な傾向を明らかにしたい。

以下、《汉语方音字汇》より舌上音（知母・徹母・澄母）、正歯三等音（章母・昌母・船母・書母・禅母）字を抽出し、それぞれ『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』における仮名表記を示す。それを十六摂（果摂に舌上音・正歯三等音字は存在しないため、実際には十五摂）及び声母によって分けた後、四県音と海陸音の字音に基づき考察を行うこととする。

なお、声母の分類は実際の字音に従い、①知母・章母、②徹母・澄母・昌母、③船母・書母・禅母の３グループとした。全濁音の澄母を次清音の徹母・昌母と同一グループとしたのは、客家語において中古音の全濁音は、閉鎖音・閉鎖摩擦音では声調を問わず原則として有気音となるためである。また、同一の声母内における分類は、

a. 開口：平声・上声・去声
b. 開口：入声
c. 合口：平声・上声・去声
d. 合口：入声

とする。a.～d. 内の配列は、声調→韻目の順に従う。

『新語書』・『用語』には声調表記がないため、調類・調値については考察対象としない。従って、『広東語辞典』記載の声調符号は省略した。ただし、凡例に四県音に依拠するとの記述があることから、四県音・海陸音で共通の声母・韻母を持つ場合、『広東語辞典』の欄に書かれる音注は四県音と判断す

る。本節では、以下これについて言及しない。

四県音・海陸音の字音は、全て《教育部 臺灣客家語常用詞辭典》による。また、ホーロー語の字音は、全て《教育部 臺灣閩南語常用詞辭典》による。

なお、本節では『用語（広東語)』は『用語』、『広東語辞典』は『辞典』とする。

2.1　通摂

2.1.1　知母・章母

c. 合口：平声・上声・去声（四県 tsuŋ ― 海陸 tʃuŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
中	チユン チヨン	ツン ツン ツ̣ン	チュン	通 通	合 合	三 三	平 去	東 送	知 知
忠	チユン		チュン	通	合	三	平	東	知
終			チュン	通	合	三	平	東	章
鐘	チユン チユーン	ツヌ ツン	チュン	通	合	三	平	鍾	章
種	チウン チウーン チユン	ツン	チュン	通 通	合 合	三 三	上 去	腫 用	章 章
腫	チユン		チュン	通	合	三	上	腫	章
衆	チユン		チュン	通	合	三	去	送	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「中：チユン／チヨン」は、主母音である奥舌円唇高母音が日本人にとっては「ウ」ないし「オ」のどちらにも聞こえる音であったことの反映と考えられる。

d. 合口：入声（四県 tsuk ― 海陸 tʃuk）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
竹	チユッ チヨッ	ツツ	チュク	通	合	三	入	屋	知
築			チュク	通	合	三	入	屋	知
祝			チュク	通	合	三	入	屋	章
粥	チユッ		チュク	通	合	三	入	屋	章
燭	チユッ		チュク	通	合	三	入	燭	章
嘱	チユッ		チュク	通	合	三	入	燭	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「竹：チユッ／チヨッ」は、上述の「中：チユン／チヨン」と同様に、奥舌円唇高母音が日本人にとっては「ウ」あるいは「オ」のどちらにも聞こえる音であったことの反映と考えられる。

２．１．２　徹母・澄母・昌母

c. 合口：平声・上声・去声（四県 ts'uŋ ― 海陸 tʃ'uŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
寵			チュン	通	合	三	上	腫	徹
蟲	チユン		チュン	通	合	三	平	東	澄
重	チユン チヨン		チュン平 チュン上	通 通	合 合	三 三	平 上	鍾 腫	澄 澄
仲	チユン		チュン	通	合	三	去	送	澄
充			チュン	通	合	三	平	東	昌
冲	チユン		チュン	通	合	三	平	鍾	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「重：チユン／チヨン」は、上述の「中：チユン／チヨン」、「竹：チユッ／チヨッ」と同様の原因が考えられる。

d. 合口：入声（四県 ts‘uk—海陸 tʃ‘uk）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
逐	チユッ		キゥク	通	合	三	入	屋	澄
觸	チッ		ツ̣ク	通	合	三	入	燭	昌

・『辞典』「逐：キゥク」は、四県音・海陸音における別音 kiuk の反映と考えられる。

・『新語書』「觸：チッ」については、ホーロー語 ts‘ik（白話音：陰入声）の影響が考えられる。

2．1．3　船母・書母・禅母

c. 合口：平声・上声・去声（四県 tsuŋ ― 海陸 tʃuŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
春			チュン	通	合	三	平	鍾	書

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

d. 合口：入声（四県 suk ― 海陸 ʃuk）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
贖			シュク	通	合	三	入	燭	船
叔	シユッ	スツ	シュク	通	合	三	入	屋	書
束	スッ ソウ		スク	通	合	三	入	燭	書
熟	シユッ	シユク スク	シュク	通	合	三	入	屋	禅
屬			シュク	通	合	三	入	燭	禅

・「束」は、四県音・海陸音共に suk（別音 sok）である。従って、声調表記のない『新語書』では、四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

・『新語書』「束：ソウ」は、何を反映するものか不明である。

2．2　江摂

江摂の字は少ないため、ここで仮名表記を示すことができるのは「卓」・「撞」・「濁」三字のみである。

2．2．1　知母・章母

b. 開口：入声（四県 tsok ― 海陸 tsok）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
卓	ツオッ		ソ̄ク	江	開	二	入	覚	知

・「卓」は、四県音・海陸音共に tsok である。従って、『新語書』では四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

2．2．2　徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 ts‘oŋ ― 海陸 ts‘oŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
撞	トン		ソ̄ン	江	開	二	去	絳	澄

・四県音と海陸音で字音は共通しているが、『新語書』「撞：トン」とは一致しない。これについては、ホーロー語 təŋ（陽去声）の影響が考えられる。

b. 開口：入声（四県 ts‘uk ― 海陸 tʃ‘uk）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
濁	チユッ		ツ̣ク	江	開	二	入	覚	澄

・『新語書』は海陸音、『辞典』は四県音を反映するものと判断できる。

2．3　止摂

2．3．1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsɨ ― 海陸 tʃi）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
知	デ゜ー デ゜ィ デ゜ィー ティー	チイ	チイ チィイ	止	開	三	平	支	知
蜘	デ゜ー		チウ	止	開	三	平	支	知
智	チー		チィイ	止	開	三	去	寘	知
致	チー	チイ	チィイ	止	開	三	去	至	知
置	チー		チィイ	止	開	三	去	志	知
支	キー	ツウ キイ	チィイ キイ	止	開	三	平	支	章
枝	キー		チィイ キイ	止	開	三	平	支	章
之	ツー	ツウ	ツウ	止	開	三	平	之	章
芝	ツー		ツウ	止	開	三	平	之	章
紙	チー		チィイ	止	開	三	上	紙	章
旨			チィイ	止	開	三	上	旨	章
指	チー		チィイ	止	開	三	上	旨	章
止	チー シー	ツウ	チィイ	止	開	三	上	止	章
至	チー	ツ゚ウ	チィイ	止	開	三	去	至	章
志			チィイ	止	開	三	去	志	章
誌			チィイ	止	開	三	去	志	章
痣	チー		チィイ	止	開	三	去	志	章

・原則として、『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できるが、『新語書』「之：ツー」「芝：ツー」、『辞典』「之：ツウ」「芝：ツウ」のみ四県音と考えられる。どちらも之韻であることが共通しているが、他の声母ではこの現象は見られない。

・『新語書』では、「デ゜」で始まる仮名表記が散見される。これを四県音・

海陸音と照らし合わせても、無気音／有気音の双方に現れるため、何を表すものか断定できない。「知」は、四県音・海陸音共に ti であるため、『新語書』「知：ディ／ディー／ティー」は、四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

・「蜘」も、四県音・海陸音共に ti である。『新語書』「蜘：デー」は、「ディー」の誤記かもしれない。

・『用語』「致：チイ」の「チ」については、『辞典』の凡例に「チハ（中略）ティ(ti）ノ如ク發音セラル」とあるので、そこから ti と推定する。ホーロー語 ti（陰去声）の影響が考えられる。

・「支」は、四県音・海陸音共に ki という白話音を持つ。従って、『新語書』「支：キー」、『用語』「支：キイ」は、四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。『新語書』「枝：キー」も同様である。

・「支」については、四県音では文言音 tsi があるのに対し、海陸音ではそれに対応する文言音は見られない。従って、『辞典』「支：チィイ」は、ホーロー語 tsi（文言音：陰平声）の影響が考えられる。

・『新語書』「止：シー」は、何を反映するものか不明である。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 tsui ― 海陸 tʃui）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
追	チユイ		チュイ	止	合	三	平	脂	知

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2．3．2　徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 ts‘i ― 海陸 tʃ‘i）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
痴			チィイ	止	開	三	平	之	徹
恥	チー		チィイ	止	開	三	上	止	徹
池	チー		チィイ	止	開	三	平	支	澄
遲	チー		チィイ	止	開	三	平	脂	澄
持	チー		チィイ	止	開	三	平	之	澄
稚			チィイ	止	開	三	去	至	澄
治	チー	ツウ	チィイ	止	開	三	去	志	澄
齒	チー		チィイ	止	開	三	上	止	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 ts‘ui／ts‘oi ― 海陸 tʃ‘ui／tʃ‘oi）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
墜	チユイ			止	合	三	去	至	澄
吹	チユイ		チョイ	止	合	三	平	支	昌
炊			チュイ チョイ	止	合	三	平	支	昌

「吹」は、四県音 ts‘oi ― 海陸音 tʃ‘oi である。『辞典』「吹：チョイ」は海陸音の反映と考えられるが、『新語書』「吹：チユイ」は厦門語 ts‘ui（文言音：陰平声）の影響が考えられる。

・「炊」は四県音 ts‘ui／ts‘oi ― 海陸音 tʃ‘ui／tʃ‘oi となる多音字である。『辞典』はその両者を反映している。

2．3．3　船母・書母・禅母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 si ― 海陸 ʃi）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
示	シー		シィイ	止	開	三	去	至	船
施			シィイ	止	開	三	平	支	書
尸	屍シー		シィイ	止	開	三	平	脂	書
詩	シー		シィイ	止	開	三	平	之	書
始			チ̣ィイ	止	開	三	上	止	書
翅	（キー）		チ̣ィ	止	開	三	去	寘	書
試	シー チー		シィイ チ̣ィイ	止	開	三	去	志	書
匙	シー デ゛ー			止	開	三	平	支	禅
時	シー	スウ	シィイ	止	開	三	平	之	禅
是	シー	スウ	シィイ	止	開	三	上	紙	禅
市	シー		シィイ	止	開	三	上	止	禅
視	シー		シィイ	止	開	三	去	至	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「試：チー」、『辞典』「始：チ̣ィイ」「試：チ̣ィイ」は、海陸音における別音 tʃi の反映と考えられる。

『新語書』「翅：キー」は、何を反映するものか不明である。

『新語書』「匙：デ゛ー」は、何を反映するものか不明である。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 sui／soi ― 海陸 ʃui／ʃoi）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
水	シユイ スイ	スイ	シュイ	止	合	三	上	旨	書
垂			スイ チュイ	止	合	三	平	支	禅
誰	シユイ スイ		スイ	止	合	三	平	脂	禅
睡	シヨイ スイ		ショイ	止	合	三	去	寘	禅
瑞	スイ		スイ	止	合	三	去	寘	禅

・「水」は、四県音 sui ― 海陸音 ʃui である。『新語書』「水：スイ」は四県音、「シユイ」は海陸音の反映と考えられる。

・『辞典』「垂：チュイ」は、何を反映するものか不明である。

・「睡」は、四県音 soi ― 海陸音 ʃoi である。『新語書』「睡：シヨイ」は海陸音の反映と考えられるが、「睡：スイ」については、梅県語 sui（文言音：去声）の影響が考えられる。

・「瑞」は、四県音・海陸音共に sui である。従って、『新語書』では四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

2．4　遇摂

2．4．1　知母・章母

c.　合口：平声・上声・去声（四県 tsu ― 海陸 tʃu）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
猪	チウー	ツウ	チュウ	遇	合	三	平	魚	知
蛛	トウー		ツウ	遇	合	三	平	虞	知
株			チュウ	遇	合	三	平	虞	知
著	チユー チウー チヨッ		チュウ	遇	合	三	去	御	知
駐			チュウ	遇	合	三	去	遇	知
諸	チユー		チュウ	遇	合	三	平	魚	章
朱	チユー		チュウ	遇	合	三	平	虞	章
珠	チウー チユー ツー		チュウ	遇	合	三	平	虞	章
煮 (煑)	チウー チユー ツー	ツウ	チュウ	遇	合	三	上	語	章
主	チウー チユー	ツウ ツ̣ウ	チュウ	遇	合	三	上	麌	章
注			チュウ	遇	合	三	去	遇	章
蛀			チュウ	遇	合	三	去	遇	章
鑄			チュウ	遇	合	三	去	遇	章

・原則として、『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・「蛛」は、四県音・海陸音共に tu である。従って、『新語書』では四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

・『新語書』「著：チユー／チウー」は海陸音 tʃu、「チヨッ」は海陸音 tʃok の反映と考えられる。

・『新語書』「珠：チウー／チユー」は海陸音 tʃu、「珠：ツー」は四県音 tsu の反映と考えられる。

『新語書』「煮：チユー／チウー」は海陸音 tʃu、「煮：ツー」は四県音 tsu の反映と考えられる。

2．4．2　徹母・澄母・昌母

c.　合口：平声・上声・去声（四県 ts‘u ― 海陸 tʃ‘u）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
除	チウー		チ̣ュウ	遇	合	三	平	魚	澄
儲			シュウ	遇	合	三	平	魚	澄
厨		ツウ	チ̣ュウ	遇	合	三	平	虞	澄
橱	チウー			遇	合	三	平	虞	澄
柱	チウ チユー ツウー		チ̣ュウ	遇	合	三	上	麌	澄
住	チウー チユー ツー キー	ツウ ツ̣ウ	チ̣ュウ	遇	合	三	去	遇	澄
處	チウー チユー	ツウ スウ	チ̣ュウ	遇 遇	合 合	三 三	上 去	語 御	昌 昌

・原則として、『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『辞典』「儲：シュウ」は、海陸音における別音 ʃu の反映と考えられる。

・『新語書』「柱：チウ／チユー」は海陸音 tʃ‘u、「ツウー」は四県音 ts‘u の反映と考えられる。

・『新語書』「住：チウー／チユー」は海陸音 tʃ‘u、「ツー」は四県音 ts‘u の反映と考えられる。

・『新語書』「住：キー」は、何を反映するものか不明である。

・『用語』「處：スウ」は、広州語 sy（白話音：陰去声）の影響が考えられるかもしれない。

2．4．3　船母・書母・禅母

c. 合口：平声・上声・去声（四県 su／ts'u ― 海陸 ʃu／tʃ'u）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
書	シユー	スウ	シュウ	遇	合	三	平	魚	書
輸	シユー		シュウ	遇	合	三	平	虞	書
黍	シユー		シウ	遇	合	三	上	語	書
暑	ツ チウー チユー		チュウ	遇	合	三	上	語	書
鼠	ツ チユー	ツウ	チュウ	遇	合	三	上	語	書
薯	シユー		シュウ	遇 遇	合 合	三 三	平 去	魚 御	禅 禅
樹	シユー		シュウ	遇 遇	合 合	三 三	上 去	麌 遇	禅 禅

・原則として、『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・「暑」「鼠」は、どちらも四県音 ts'u―海陸音 tʃ'u である。『新語書』において実際には、「暑チウー」「鼠チユー」の右上にやや小さく「ツ」が書かれている。これは、四県音・海陸音の双方を書き記したものと考えられる。ただし、他の箇所ではこの種の表記は見られない。

2．5　蟹攝

2．5．1　知母・章母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 tsɨ ― 海陸 tʃi）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
制			チィイ	蟹	開	三	去	祭	章
製	チー チエー		チィイ	蟹	開	三	去	祭	章

・『新語書』「製：チエー」は、ホーロー語 tse（陰去声）の影響が考えられる。

c. 合口：平声・上声・去声

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
贅			チュイ	蟹	合	三	去	祭	章

・《教育部 臺灣客家語常用詞辭典》には「贅」が項目として収録されていないため、四県音・海陸音の判断ができない。《客英大辭典》では「chùi」との表記がある。

2．5．2　徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
滯			チェエ	蟹	開	三	去	祭	澄

・《教育部 臺灣客家語常用詞辭典》には「滯」が項目として収録されていないため、四県音・海陸音の判断ができない。《客英大辭典》では「chhè」との表記がある。

2．5．3　船母・書母・禅母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 si／se ― 海陸 ʃi／ʃe）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
世	シエー シー		シェエ シィイ	蟹	開	三	去	祭	書
勢	シエー		シェエ シィイ	蟹	開	三	去	祭	書
誓			シィイ	蟹	開	三	去	祭	禅

・「世」・「勢」は、四県音では se／si、海陸音では ʃe／ʃi という音を持つ多音字である。『新語書』「世：シエー」「勢：シエー」、『辞典』「世：シェエ」「勢：シェエ」は、海陸音 ʃe の反映と考えられる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 soi ― 海陸 ʃoi）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
税	シヨイ	ソエ	ショイ	蟹	合	三	去	祭	書

『用語』「税：ソエ」は、主母音 o から韻尾 -i へのわたり音を聞き取った結果と考えられる。

2.6　臻摂

2.6.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsin ― 海陸 tʃin）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
珍	チン		チィヌ	臻	開	三	平	眞	知
鎮	チン			臻	開	三	去	震	知
真	チン	チヌ チン ツヌ ツン	チィヌ	臻	開	三	平	眞	章
診	ジーン			臻	開	三	上	軫	章
疹	チン			臻	開	三	上	軫	章
振			チヌ	臻	開	三	去	震	章
震			チィヌ	臻	開	三	去	震	章

・原則として、『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『用語』「真：チヌ／チン」は海陸音、「ツヌ／ツン」は四県音の反映と考えられる。

・『新語書』「診：ジーン」は、無声無気音を有声音として聞き取った結果と考えられる。

b.　開口：入声（四県 tsit ― 海陸 tʃit）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
質	チッ		チィッ	臻	開	三	入	質	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 tsun ― 海陸 tʃun）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
准	チウン		チュヌ	臻	合	三	上	准	章
準	チユン		チュヌ	臻	合	三	上	准	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.6.2 徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 ts'in ― 海陸 tʃ'in）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
陳			チィヌ	臻	開	三	平	眞	澄
塵	チン		チィヌ	臻	開	三	平	眞	澄
陣	チン		チィヌ	臻	開	三	去	震	澄

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

b. 開口：入声（四県 ts'it ― 海陸 tʃ'it）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
侄	姪チッ	ツチ ツツ	チィッ	臻	開	三	入	質	澄

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 ts'un ― 海陸 tʃ'un）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
春	チユン		チュヌ	臻	合	三	平	諄	昌
蠢			チュヌ	臻	合	三	上	准	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

d. 合口：入声（四県 ts‘ut ― 海陸 tʃ‘ut）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
出	チユ チユッ チユーッ ツッ	ツ̣ツ	チ̣ュッ	臻	合	三	入	術	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「出：チユッ／チユーッ」は海陸音 tʃ‘ut、「ツッ」は四県音 ts‘ut の反映と考えられる。「チユ」については、入声の弱化による韻尾の脱落が考えられる。

２．６．３　船母・書母・禅母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 sin ― 海陸 ʃin）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
神	シン	スヌ	シィヌ	臻	開	三	平	眞	船
身	シン		シィヌ	臻	開	三	平	眞	書
申	シン		シィヌ	臻	開	三	平	眞	書
伸	シン		シィヌ チ̣ュヌ	臻	開	三	平	眞	書
晨			シィヌ	臻	開	三	平	眞	禅
辰	シン	スン	シィヌ	臻	開	三	平	眞	禅
臣	チン		シィヌ	臻	開	三	平	眞	禅
腎			シィヌ	臻	開	三	上	軫	禅
慎	シム シン チン		シィム	臻	開	三	去	震	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『辞典』「伸：チ̣ュヌ」は、海陸音における別音 tʃ‘un の反映と考えられる。

・『新語書』「臣：チン」は、潮州語 ts‘iŋ（陽平声）の影響が考えられるかもしれない。

・「慎」は例外的に韻尾 -m を持つため、四県音 sim―海陸音 ʃim となる。『新語書』「シム」、『辞典』「シィム」は、その字音を反映するものである。その他に、『新語書』には「慎：シン」が見られるが、これはホーロー語 sin（陽去声）の影響が考えられる。

b. 開口：入声（四県 sit ― 海陸 ʃit）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
實	シッ	シイ スウ スツ	シィッ	臻	開	三	入	質	船
失	シッ		シィッ	臻	開	三	入	質	書
室	シッ		シィッ	臻	開	三	入	質	書

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『用語』「實：シイ／スウ」は、官話の影響が考えられる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 sun ― 海陸 ʃun）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
唇	シユン		シュヌ	臻	合	三	平	諄	船
盾			ツ̣ヌ	臻	合	三	上	准	船
順	シユン		シュヌ	臻	合	三	去	稕	船
純			シュヌ	臻	合	三	平	諄	禪

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・「盾」は、四県音・海陸音共に t'un である。

d. 合口：入声（四県 sut ― 海陸 sut）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
術	スッ		スッ	臻	合	三	入	術	船
述			スッ	臻	合	三	入	術	船

・このグループは、四県音・海陸音共に sut である。従って、『新語書』では四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

２．７　山摂

２．７．１　知母・章母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 tsan ― 海陸 tʃan）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
展	テン		チャヌ	山	開	三	上	獮	知
戰	チヤン		チャヌ	山	開	三	去	綫	章

・「展」は、文言音では四県音 tsan ― 海陸音 tʃan、白話音では四県音・海陸音共に tien である。『新語書』「展：テン」は白話音と考えられるが、四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

b. 開口：入声（四県 tsat ― 海陸 tʃat）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
哲			チャッ	山	開	三	入	薛	知
浙		〒ツ		山	開	三	入	薛	章
折	チアッ チヤッ ツアッ		チャッ	山 咸	開 開	三 三	入 入	薛 葉	章 章

・『新語書』「折：チアッ／チヤッ」は海陸音 tʃat、「ツアッ」は四県音 tsat の反映と考えられる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 tson ― 海陸 tʃon）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
轉	チヤン チヨン		チョヌ上	山 山	合 合	三 三	上 去	獮 綫	知 知
專	チヨン チヨーン		チョヌ	山	合	三	平	仙	章
磚	チヨン		チョヌ	山	合	三	平	仙	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。
・『新語書』「轉：チヤン」は、何を反映するものか不明である。

2．7．2　徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 ts‘an ― 海陸 tʃ‘an）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
纏			チャヌ	山	開	三	平	仙	澄

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

b. 開口：入声（四県 ts‘at ― 海陸 tʃ‘at）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
撤			チャッ	山	開	三	入	薛	徹
徹			チャッ	山	開	三	入	薛	徹

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 ts‘on ― 海陸 tʃ‘on）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
傳	チヨン	トワン	チョヌ平	山 山	合 合	三 三	平 去	仙 綫	澄 澄
川			チョヌ	山	合	三	平	仙	昌
穿	チヨン		チョヌ	山	合	三	平	仙	昌
喘	チヨン ツオン			山	合	三	上	獮	昌
串	チヤン		チョヌ	山	合	三	去	綫	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・『用語』「傳：トワン」は、ホーロー語 t‘uan（陽平声）の影響が考えられる。

・『新語書』「喘：チヨン」は海陸音 tʃ‘on、「ツオン」は四県音 ts‘on の反映と考えられる。

２．７．３　船母・書母・禪母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 san ― 海陸 ʃan）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
扇	シヤン シエン		シャヌ	山 山	開 開	三 三	平 去	仙 綫	書 書
蟬	シヤム （ツエー）		シャム	山	開	三	平	仙	禪
善	シアン		シャヌ	山	開	三	上	獮	禪

・『新語書』「扇：シエン」は、厦門語 siɛn（陰去声）の影響が考えられる。

・《教育部 臺灣客家語常用詞辭典》には「蟬」が項目として収録されていないため、四県音・海陸音の判断ができない。《客英大辭典》では「shâm」との表記がある。

・『新語書』「蟬：ツエー」は、何を反映するものか不明である。

b. 開口：入声（四県 sat ― 海陸 ʃat）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
舌	シヤッ		シャッ	山	開	三	入	薛	船
設	シヤッ		シャッ	山	開	三	入	薛	書

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

c. 合口：平声・上声・去声（四県 son ― 海陸 ʃon）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
船	舩シヤン シヨン	ソワヌ	ショヌ	山	合	三	平	仙	船

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「舩：シヤン」、『用語』「船：ソワヌ」は、何を反映するものか不明である。台湾客家語の饒平音 ʃan の影響も考えられるかもしれない。

d. 合口：入声（四県 sot ― 海陸 ʃot）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
説	シヤッ シヨッ		ショッ	山	合	三	入	薛	書

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「説：シヤッ」は、何を反映するものか不明である。

2．8　効摂

2．8．1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tseu ― 海陸 tʃau）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
朝	チャウ	セウ	セウ	效	開	三	平	宵	知
罩	ツアオ ターウ テウ			效	開	二	去	效	知
招	チヤウ	セウ セウ	セウ	效	開	三	平	宵	章
照	チヤウ	セウ セウ	セウ	效	開	三	去	笑	章

・原則として、『新語書』は海陸音、『用語』・『辞典』は四県音を反映するものと判断できる。

・「罩」は、四県音・海陸音共に tsau である。従って、『新語書』「罩：ツアオ」は、四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

・『新語書』「罩：ターウ」は、ホーロー語 tau（陰去声）の影響が考えられる。

・『新語書』「テウ」は、何を反映するものか不明である。

2．8．2　徹母・澄母・昌母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 ts‘eu ― 海陸 tʃ‘au）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
超			セウ	效	開	三	平	宵	徹
朝	チヤウ		セウ	效	開	三	平	宵	澄
潮	チヤウ		セウ	效	開	三	平	宵	澄
兆	シヤウ		セウ	效	開	三	上	小	澄

・『新語書』は海陸音を、『辞典』は四県音を反映するものと判断できる。

・「兆」は、四県音 seu ― 海陸音 ʃau である。『新語書』「兆：シヤウ」は

海陸音、『辞典』「セウ」は四県音の反映と考えられる。

2.8.3　船母・書母・禅母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 seu ― 海陸 ʃau）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
燒	シヤウ ショウ		シェウ	效	開	三	平	宵	書
少	シヤー シヤウ ショー ショウ	セウ	セウ	效 效	開 開	三 三	上 去	小 笑	書 書
紹	シヤウ		セウ	效	開	三	上	小	禅

・原則として『新語書』は海陸音を、『用語』・『辞典』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「燒：シヨウ」は、ホーロー語 sio（陰平声）の影響が考えられる。

・『新語書』「少：シヨー／シヨウ」は、潮州語 siəu（文言音：陰上声）の影響が考えられるかもしれない。

2.9　假摂

2.9.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsa ― 海陸 tʃa）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
遮	チヤー		チャア	假	開	三	平	麻	章
者	チヤー		チャア	假	開	三	上	馬	章
蔗	チヤー		チャア	假	開	三	去	禡	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2．9．2　徹母・澄母・昌母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 ts‘a ― 海陸 tʃ‘a）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
茶	ツアー サー	サア	サ̣ア	假	開	二	平	麻	澄
車	チヤー		チ̣ャア	假	開	三	平	麻	昌
扯	チヤー			假	開	三	上	馬	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「茶：サー」は、何を反映するものか不明である。

2．9．3　船母・書母・禪母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 sa／ts‘a―海陸 ʃa／tʃ‘a）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
蛇	シアー シヤー		シャア	假	開	三	平	麻	船
射	シヤー		シャア	假	開	三	去	禡	船
賒			チ̣ャア	假	開	三	平	麻	書
捨			シャア	假	開	三	上	馬	書
舍			シャア	假	開	三	去	禡	書
赦	シヤー		シャア	假	開	三	去	禡	書
社	シアー シヤー		シャア	假	開	三	上	馬	禪

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・「賒」は、四県音 ts‘a ― 海陸音 tʃ‘a である。『辞典』「賒：チ̣ャア」は海陸音の反映と考えられる。

2.10　宕摂

2.10.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsoŋ ― 海陸 tʃoŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
張	チヨン		チョン	宕	開	三	平	陽	知
長	チヨン	ツン	チョン	宕	開	三	上	養	知
帳	チヤン チヨン		チョン	宕	開	三	去	漾	知
脹	チヨン		チョン	宕	開	三	去	漾	知
章	チヨン		チョン	宕	開	三	平	陽	章
樟	チヨン		チョン	宕	開	三	平	陽	章
掌	チヨン		チョン	宕	開	三	上	養	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「帳：チヤン」は、官話の影響が考えられる。

2.10.2　徹母・澄母・昌母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 ts‘oŋ ― 海陸 tʃ‘oŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
暢			チョヌ	宕	開	三	去	漾	徹
長	チヨン	ツン ツオン	チョン	宕	開	三	平	陽	澄
腸			チョン	宕	開	三	平	陽	澄
場			チョン	宕	開	三	平	陽	澄
丈	チヨン	ツン	チョン	宕	開	三	上	養	澄
杖			チョン	宕	開	三	上	養	澄
昌	チヨン			宕	開	三	平	陽	昌
唱	チヨン		チョン	宕	開	三	去	漾	昌
倡				宕	開	三	去	漾	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断でき

る。

・「暢」は四県音・海陸音共に t'ioŋ である。四県音と海陸音で字音は共通しているが、『辞典』「暢：チョヌ」とは一致しない。これについては、何を反映するものか不明である。

b. 開口：入声（四県 ts'ok ― 海陸 tʃ'ok）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
着	チヤッ チヨッ	ソク ソク	チョク	宕	開	三	入	薬	澄

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「着：チヤッ」は、何を反映するものか不明である。

2.10.3　船母・書母・禅母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 soŋ ― 海陸 ʃoŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
商	ション		ション	宕	開	三	平	陽	書
傷	ション	ソン	ション	宕	開	三	平	陽	書
賞	ション		ション	宕	開	三	上	養	書
常	ション	ソン	ション	宕	開	三	平	陽	禅
嘗	ション			宕	開	三	平	陽	禅
償			ション	宕	開	三	平	陽	禅
上	シヤン ション	ソヌ ソン	ション	宕 宕	開 開	三 三	上 去	養 漾	禅 禅
尚	ション		ション	宕	開	三	去	漾	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「上：シヤン」は、ホーロー語 siaŋ（陽去声）の影響が考えられる。

b. 開口：入声（四県 sok ― 海陸 ʃok）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
勺			ショク	宕	開	三	入	藥	禪

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.11　梗摂

原則として、韻尾 -n（入声 -t）では主母音は -i、韻尾 -ŋ（入声 -k）では主母音は -a となる。

2.11.1　知母・章母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 tsɨn／tsaŋ ― 海陸 tʃin／tʃaŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
貞			チィヌ	梗	開	三	平	清	知
正	チン チヤン	ツン サン	チィヌ	梗 梗	開 開	三 三	平 去	清 勁	章 章
整	チン チーン		チャン	梗	開	三	上	静	章
政	チン		チィヌ	梗	開	三	去	勁	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・「正」「整」は、どちらも四県音 tsɨn／tsaŋ ― 海陸音 tʃin／tʃaŋ となる多音字である。『新語書』「正：チン」、『辞典』「正：チィヌ」は海陸音 tʃin、『新語書』「正：チヤン」は海陸音 tʃaŋ の反映と考えられる。「整」についても同様である。

・『用語』「正：ツン」は四県音 tsɨn、「サン」は四県音 tsaŋ の反映と考えられる。

b. 開口：入声（四県 tsak ― 海陸 tsak／tʃak）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
摘	ツアー		㋮ク	梗	開	二	入	麦	知
隻	チヤッ	㋮ツ	チャク	梗	開	三	入	昔	章

・「摘」は、四県音・海陸音共に tsak である。

・『新語書』「摘：ツアー」は、何を反映するものか不明である。

2.11.2　徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 ts‘in／ts‘aŋ ― 海陸 tʃ‘in／tʃ‘aŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
撐			撐㋮ン	梗	開	二	平	庚	徹
呈			チ̣ィヌ	梗	開	三	平	清	澄
程	チヤン		チ̣ィヌ	梗	開	三	平	清	澄

・「程」は、四県音 ts‘aŋ ― 海陸音 tʃ‘aŋ である。『辞典』「程：チ̣ィヌ」は、どちらとも一致しない。これについては、何を反映するものか不明である。

b. 開口：入声（四県 ts‘et／ts‘ak ― 海陸 ts‘et／tʃ‘ak）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
拆			㋮ク̣	梗	開	二	入	陌	徹
擇			ト̣ク	梗	開	二	入	陌	澄
澤	チエッ			梗	開	二	入	陌	澄
尺	チヤッ		チ̣ャク	梗	開	三	入	昔	昌
赤	チヤ チヤー チヤッ		チ̣ャク	梗	開	三	入	昔	昌

・「拆」は、四県音・海陸音共に ts‘ak である。

・「擇」は、文言音では四県音・海陸音共に ts‘et、白話音では四県音・海陸音共に t‘ok である。『辞典』「擇：ト̣ク」は四県音における白話音の反映と考えられる。

2.11.3　船母・書母・禅母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 sin／saŋ ― 海陸 ʃin／ʃaŋ）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
聲	シヤン ジヤン	サン	シャン	梗	開	三	平	清	書
聖			シィヌ	梗	開	三	去	勁	書
成	シン チヤン	サン	シィヌ シャン	梗	開	三	平	清	禅
城	シヤン シヨン	サン	シャン	梗	開	三	平	清	禅
誠	シン		シィヌ	梗	開	三	平	清	禅
盛	シン		シィヌ	梗 梗	開 開	三 三	平 去	清 勁	禅 禅

・「聲」「城」は、どちらも四県音 saŋ ― 海陸音 ʃaŋ である。『新語書』「聲：シヤン」「城：シヤン」、『辞典』「聲：シャン」「城：シャン」は、海陸音の反映と考えられる。

・『新語書』「成：チヤン」はホーロー語 tsiã（白話音：陽平声）、『辞典』「成：シャン」はホーロー語 siã（白話音：陽平声）の影響が考えられる。

b.　開口：入声（四県 sit／sak ― 海陸 ʃit／ʃak）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
適	シク シッ		シィッ	梗	開	三	入	昔	書
釋			シッ	梗	開	三	入	昔	書
石	シヤッ	サク	シャク	梗	開	三	入	昔	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「適：シク」は、ホーロー語 sik（陰入声）の影響が考えられる。

・「石」は、四県音 sak ― 海陸音 ʃak である。『新語書』「シヤッ」、『辞典』「シャク」は海陸音、『用語』「サク」は四県音の反映と考えられる。

2.12　曽摂

原則として韻尾は -n（入声 -t）、主母音は -i となる。

2.12.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsin ― 海陸 tʃin）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
征			チィヌ	曽	開	三	平	蒸	知
蒸	チン		チィヌ	曽	開	三	平	蒸	章
證	チン		チィヌ	曽	開	三	去	證	章
症	チン	チン	チィヌ	曽	開	三	去	證	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。
・『用語』「症：チン」は、海陸音の反映と考えられる。

b.　開口：入声（四県 tsit ― 海陸 tʃit）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
織			チィッ	曽	開	三	入	職	章
職	チッ		チィッ	曽	開	三	入	職	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.12.2　徹母・澄母・昌母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 ts'in ― 海陸 tʃ'in）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
懲			チィヌ	曽	開	三	平	蒸	澄
称			チィヌ	曽 曽	開 開	三 三	平 去	蒸 證	昌 昌
秤	チン		チィヌ	曽	開	三	去	證	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

b. 開口：入声（四県 tsʻit ― 海陸 tʃʻit）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
直	チッ		チィッ	曽	開	三	入	職	澄
値	チッ		チィッ	曽	開	三	入	職	澄

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.12.3　船母・書母・禅母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 sin ― 海陸 ʃin）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
乗			シィヌ	曽	開	三	平	蒸	船
縄	シエーン			曽	開	三	平	蒸	船
昇			シィヌ	曽	開	三	平	蒸	書
勝	シン シーン		シィヌ	曽	開	三	去	證	書
承	シン		シィヌ	曽	開	三	平	蒸	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。
・『新語書』「縄：シエーン」は、何を反映するものか不明である。

b. 開口：入声（四県 sit／tsʻit ― 海陸 ʃit／tʃʻit）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
食	シッ	スツ スウツ	シィッ	曽	開	三	入	職	船
蝕	シッ		シャッ	曽	開	三	入	職	船
識	シッ	スツ	シィッ	曽	開	三	入	職	書
飾	シッ （ヒッ）			曽	開	三	入	職	書
式	シッ		シィッ	曽	開	三	入	職	書
植			チィッ	曽	開	三	入	職	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・「蝕」は、四県音 sat／sit ― 海陸音 ʃat／ʃit となる多音字である。『新語書』「シッ」は海陸音 ʃit、『辞典』「シャッ」は海陸音 ʃat の反映と考えられる。

・『新語書』「飾：ヒッ」は、何を反映するものか不明である。

・「植」は、四県音 ts'it ― 海陸音 tʃ'it である。『辞典』「チィッ」は海陸音の反映と考えられる。

2.13　流摂

2.13.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsu ― 海陸 tʃiu）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
肘	デュートー			流	開	三	上	有	知
晝		ツウ	チィウ	流	開	三	去	宥	知
周	チユー		チィウ	流	開	三	平	尤	章
州	チユー	ツウ	チィウ	流	開	三	平	尤	章
洲	チユー		チィウ	流	開	三	平	尤	章
帚	（パー）		箒シウ	流	開	三	上	有	章
咒			チィウ チュウ	流	開	三	去	宥	章

・原則として、『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「肘：デュー」は、ホーロー語 tiu（上声）の影響が考えられる。

・『新語書』「帚：パー」については、『辞典』に「掃把ソオパア」という音注が見られる(5)ことから、一種の訓読と考えられる。

2.13.2　徹母・澄母・昌母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 ts'u ― 海陸 tʃ'iu）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
抽	チユー		チ̣ィウ	流	開	三	平	尤	徹
丑	チウー		チ̣ィウ	流	開	三	上	有	徹
綢	チウー チユー		チ̣ィウ	流	開	三	平	尤	澄
籌			チ̣ィウ	流	開	三	平	尤	澄
醜	チユー		チ̣ィウ	流	開	三	上	有	昌
臭	チウー チユー		チ̣ィウ	流	開	三	去	宥	昌

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

2.13.3　船母・書母・禅母

a. 開口：平声・上声・去声（四県 su／ts'u ― 海陸 ʃiu／tʃ'iu）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
收	シユー	スウ	シィウ	流	開	三	平	尤	書
手	シウ シユー	スウ	シィウ	流	開	三	上	有	書
首	シユー		シィウ	流	開	三	上	有	書
守	シユー	スウ	シィウ	流	開	三	上	有	書
獣			チ̣ィウ	流	開	三	去	宥	書
仇			シィウ	流	開	三	平	尤	禅
酬			チ̣ィウ	流	開	三	平	尤	禅
受	シユー	スウ	シィウ	流	開	三	上	有	禅
壽			シィウ	流	開	三	去	宥	禅
授			シィウ	流	開	三	去	宥	禅

・『新語書』・『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと判断できる。

・「獣」「酬」は、共に四県音 ts'u―海陸音 tʃ'iu である。『辞典』「獣：チ̣ィ

ウ」「酬：チィウ」は海陸音の反映と考えられる。

2.14　深摂

2.14.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsim ― 海陸 tʃim）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
針	チム		チィム	深	開	三	平	侵	章
斟	チム （カーム）		チィム	深	開	三	平	侵	章
枕	チム チン		チィム	深 深	開 開	三 三	上 去	寢 沁	章 章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「斟：カーム」は、何を反映するものか不明である。

b.　開口：入声（四県 tsip ― 海陸 tʃip）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
汁	チッ チップ		チィプ	深	開	三	入	緝	章
執	チップ		チィプ	深	開	三	入	緝	章

・『新語書』・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.14.2　徹母・澄母・昌母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 ts'im ― 海陸 tʃ'im）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
沈			チィム	深	開	三	平	侵	澄

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.14.3　船母・書母・禅母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 sim／ts‘im ― 海陸 ʃim／tʃ‘im）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
深	チム	チム	チ̣ィム	深	開	三	平	侵	書
審	シム		シィム	深	開	三	上	寢	書
嬸	チム			深	開	三	上	寢	書
甚	シム シン			深	開	三	上	寢	禅

・「深」は、四県音 ts‘im ― 海陸音 tʃ‘im である。『新語書』「深：チム」、『用語』「深：チム」、『辞典』「深：チ̣ィム」は全て海陸音の反映と考えられる。

b.　開口：入声（四県 sip ― 海陸 ʃip）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
濕	シップ シプ シユッ		シィブ	深	開	三	入	緝	書
十	シユウ シップ シユッ シユプ	シプ スウ スツ	シィブ	深	開	三	入	緝	禅
拾	シツッ シプ シユッ		シィブ	深	開	三	入	緝	禅

・『新語書』「濕：シュッ」は、原本では「シエッ」にも見える。ただ、いずれの場合も何を反映するものか不明である。

・『新語書』「十：シユッ／シユプ」、「拾：シユッ」は、何を反映するものか不明である。

・『新語書』「十：シユウ」は、後続する音の影響による韻尾の弱化を反映するものと考えられる。

・『用語』「十：シプ」は海陸音、「スツ」は四県音の反映と考えられる。また、「スウ」は官話の影響が考えられる。

2.15　咸摂

2.15.1　知母・章母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 tsam ― 海陸 tʃam）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
站	デアム デヤム		サ̄ム	咸	開	二	去	陷	知
占			チァム チャム	咸	開	三	去	艶	章

・「站」は、四県音 tsam ― 海陸音 tʃam、あるいは四県音・海陸音共に ts'am となる多音字である。『辞典』「サ̄ム」は ts'am の反映と考えられる。

・『新語書』「站：デアム／デヤム」は、何を反映するものか不明である。

2.15.2　徹母・澄母・昌母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 ts'on ― 海陸 ts'on）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
賺[6]	聰ツオン	賻ソ̄ワヌ	聰ソ̄ヌ	咸	開	二	去	陷	澄

・「聰」は、四県音・海陸音共に ts'on である。従って、『新語書』「ツオン」は、四県音と海陸音のどちらを反映しているのか判断できない。

・『用語』「賻：ソ̄ワヌ」は、ホーロー語 tsuan（陽去声）の影響が考えられる。

2.15.3　船母・書母・禅母

a.　開口：平声・上声・去声（四県 sam ― 海陸 ʃam）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
閃	シヤッ シヤップ		シャム	咸	開	三	上	琰	書

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

・『新語書』「閃：シヤッ／シヤップ」は、何を反映するものか不明である。

b. 開口：入声（四県 sap ― 海陸 ʃap）

例字	新語書	用語	辞典	摂	開合	等位	声調	韻目	声母
渉			シャブ	咸	開	三	入	葉	禅

・『辞典』は海陸音を反映するものと判断できる。

2.16　小結

以上、『新語書』・『用語』・『辞典』における舌上音（知母・徹母・澄母）、正歯三等音（章母・昌母・船母・書母・禅母）字の仮名表記について、四県音・海陸音の字音に基づき考察を行った。その結果は、以下の三つに分類できる。

①四県音と海陸音で声母・韻母が共通し、かつ三者全てでこの音を反映すると考えられるもの
②四県音と海陸音の字音の差異を反映すると考えられるもの
③その他の地域の字音を反映すると考えられるもの

①に当てはまるものは極めて少ない。そもそも舌上音・正歯三等音では、四県音が ts-・ts‘-・s-、海陸音が tʃ-・tʃ ‘-・ʃ- という対立を持つケースが圧倒的多数で、四県音・海陸音で声母・韻母が共通するものは、ごく一部に限られるからである。

②については、ほぼ全ての摂において、四県音と海陸音の差異を反映するものが存在する。基本的には、『新語書』と『辞典』は海陸音、『用語』は四県音を反映するものと考えられる。ただし、『辞典』の效摂に限っては、明確に四県音を反映するものと判断できる。

『新語書』については、同一の字に複数の仮名表記を施すものが相当数存在する。これらのうち、表記の揺れを除外した残りについて考察を行ったが、四県音を反映するものも数多く見られた。しかしながら、総体的には海陸音が優勢と判断してよい。

③については、ホーロー語や厦門語・梅県語・潮州語・広州語・官話の影響を考えるべき例も散見された。

おわりに

『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』は字書ではないため、全ての音節を網羅するものではなく、用字には偏りがある。特に『用語（広東語）』は戸口調査用のフレーズ集であるため、記載されているフレーズや字は限定的である。そのため、大まかな傾向を述べるにとどめる。

山村2022では、『新語書』・『用語（広東語）』・『広東語辞典』における影母・以母・云母・日母字の仮名表記について、四県音・海陸音の字音に基づき考察を行った。その結果、『新語書』では、四県音あるいは海陸音の明確な体系は見られず、同一の摂内に両者が混在する状態であったため、どちらが優勢と判断することはできなかった。しかし、舌上音（知母・徹母・澄母）、正歯三等音（章母・昌母・船母・書母・禅母）字については、かなり明確な海陸音の体系が見られた。また、一字に四県音・海陸音の双方が見られるものも相当数確認できた。『用語』については、ほぼ全てが四県音と判断できる。『辞典』については、凡例に四県音に依拠するとの記述があるにもかかわらず、このグループにおいては明らかに海陸音の体系を示している点を考えるに、『辞典』の依拠する方言についても更なる考察が必要である。

台湾客家語は、四県音が話者数・使用地域において優勢であるため、日本統治時代を通じて辞典・会話本は四県音に依拠するものが多い。しかし、四県音と海陸音の隣接する地域では、双方の接触により互いに影響を与え合い、一種の混合語が生じていたと考えられる。現在の台湾では、四県音と海陸音の接触の結果、「四海音」が形成されつつあるという(7)。

もちろん、『新語書』が書かれた20世紀初頭の段階で、どこまで四県音・海陸音の接触が進んでいたかについては更なる調査や考察が必要であろうが、『新語書』の音注は四県音・海陸音の混在状況を如実に示すものであり、かつ「四海音」の形成へとつながる前段階とも考えられる。

また上記の他に、ホーロー語や厦門語・梅県語・潮州語・広州語・官話の影響を考えるべき例も散見された。

現在、『新語書』および『用語（広東語）』の字音体系の整理作業が進行中であるが、声母・韻母の体系等の総合的な報告は別の機会に譲りたい。

註

（１）菅向榮『標準広東語典』「凡例二」で、仮名による標音システムを「符號假名」と称しているので、本稿もこれに従う。

（２）台湾では一般に「台語（台湾語）」と呼ばれる。また「閩南話（閩南語）」と呼ばれることもあるが、比較的中立的な名称として「ホーロー語」の使用が増えているため、本稿では「ホーロー語」と表記する。「ホーロー」は「福佬」「鶴佬」「河洛」等の表記があるため、「ホーロー」とする。

（３）台湾に居住する客家人の多くが広東からの移住者であったため、日本統治期の台湾における客家語は「広東語」と呼ばれた。従って、この時期に使用される「広東語」という名称は、今日一般的に言うところの広東語（広州語）ではないことに留意する必要がある。これは、香坂順一が「本冊子の「廣東語」とは臺灣に於ける所謂「廣東語」ではなく、廣東省城語卽ち「廣州語」たることである。臺灣に於ける「廣東語」は、實は「客家語」であつて、支那方言の系統から言ふならば別な一系に屬する。この點誤解のない様にして戴きたい。」（『広東語の研究』緒言）と述べていることからも分かる。本稿では、広東語（広州語）と区別するため、日本統治期の台湾における客家語を「広東語」と表記することとする。

（４）『広東語辞典』は縦書きのため、引用文中のアンダーラインは、原文においては全て右傍線である。以下、『広東語辞典』凡例からの引用文にアンダーラインがある場合、全て同様である。

（５）『広東語辞典』p. 1332上段「ホオキ」

（６）『大漢和辞典』では、「䛗（36906）」は「賺（36880）」に同じとある。また、「賻（36798）」は別字ではあるが、用例を見る限り「賺」と同じ意味で用いられているため、ここに例字として挙げた。

（７）羅濟立2019，p. 532-534

参考文献・資料

・菅向榮，1933，『標準廣東語典　附 臺灣俚諺集 重要單語集』，臺灣警察協會

・臨時臺灣戸口調査部，1905，『明治三十八年　戸口調査用語』（外地国勢調査報告　第五輯：台湾総督府国勢調査報告　第十二冊「明治三十八年　戸口調査用語　土語・広東語」，2000，文生書院）

・臨時臺灣戸口調査部，1905，『明治三十八年　戸口調査用語（廣東語）』（外地国勢調

査報告　第五輯：台湾総督府国勢調査報告　第十二冊「明治三十八年　戸口調査用語土語・広東語」，2000，文生書院）
・臨時臺灣戸口調査部，1908，『明治三十八年　臨時臺灣戸口調査記述報文』（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A06032544600、国立公文書館 所蔵）
・臺灣總督府，1931，『臺日大辭典』（1983，『台湾語大辞典』，国書刊行会）
・臺灣總督府，1932，『廣東語辭典』（1993，『広東語辞典』，国書刊行会）
・臺灣総督府民政局學務部，1895，『臺灣十五音及字母：附八聲符號』（旧外地関係資料アーカイブ　http://opac.lib.takushoku-u.ac.jp/kyugaichi/htmls/views/2017_005.html）
・臺灣総督府民政局學務部，1896，『新日本語言集　甲號』（国立国会図書館デジタルコレクション　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/863157）
・臺灣総督府民政局學務部，1896，『臺灣十五音及字母：附八聲符號 訂正』（旧外地関係資料アーカイブ　http://opac.lib.takushoku-u.ac.jp/kyugaichi/htmls/views/2017_006.html）
・北京大学中国语言文学系语言学教研室编，1989，《汉语方音字汇》，文字改革出版社
・遠藤雅裕，2016，『台湾海陸客家語語彙集 附同音字表』，中央大学出版部
・黄雪贞编写，1997，《梅县话音档》（現代汉语方言音库），上海教育出版社
・香坂順一，1942，『廣東語の研究　附常用文字聲音字典』，臺北高等商業學校調査課
・賴文英，2020，《語言接觸下客語的變遷》，國立中央大學出版中心
・李榮主編，1995，『梅縣方言詞典』（現代漢語方言大詞典・分卷），江蘇教育出版社
・羅濟立，2007a，「日本統治初期の客家語仮名遣いについての一考察 ──「廣東語」『臺灣土語叢誌』」の同字異注を中心に」，『東呉外語學報』24期
・羅濟立，2007b，「『廣東語會話篇（1916年再版）』の同字異注について ── 声母を中心に」，『台灣日本語文學報』22號
・羅濟立，2011，「日客語對訳『廣東語辞典』の音韻とその特徴」，『東呉日語教育學報』36期
・中川仁監修、羅濟立著，2019，『『語苑』にみる客家語研究（日本統治下における台湾語・客家語・蕃語資料　第 2 巻）』，近現代資料刊行会
・彭馨平，民國100（2011），「日治時期台灣的客語教材研究 ── 以《廣東語集成》為例」，國立台灣師範大學台灣文化及語言文學研究所碩士班學位在職進修專班碩士論文
・冨田哲，1999，「日本統治時代初期の台湾総督府による「台湾語」の創出」，『国際開

発研究フォーラム』11
・温昌衍，2014,《广东客闽粤三大方言词汇比较研究》，中国社会科学出版社
・山村敏江，2019,「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』所収の符号仮名（1）」,『神田外語大学日本研究所紀要』第11号
・山村敏江，2020,「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』所収の符号仮名（2）」,『神田外語大学日本研究所紀要』第12号
・山村敏江，2021,「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』所収の符号仮名（3）」,『神田外語大学日本研究所紀要』第13号
・山村敏江，2022,「『日本広東学習新語書』及び『明治三十八年　戸口調査用語（広東語）』所収の符号仮名（4）」,『神田外語大学日本研究所紀要』第14号
・袁家骅等，1983,《汉语方言概要》，文字改革出版社
・周振鶴／游汝傑著、内田慶市／沈国威監訳，2015,『方言と中国文化』，光生館

ウェブサイト・資料

・教育部 臺灣客家語常用詞辭典（https://hakkadict.moe.edu.tw/cgi-bin/gs32/gsweb.cgi/ccd=j 6 oEo 0 /webmge?）
・教育部 臺灣閩南語常用詞辭典（https://twblg.dict.edu.tw/holodict_new/index.html）
・中央研究院語言學研究所　客英大辭典查詢（http://minhakka.ling.sinica.edu.tw/bkg/bkg.php?gi_gian=hoa）
・新北市客家語文館（https://www.hakka-language.ntpc.gov.tw/bin/home.php）
・行政院客家委員會全球資訊網（http://www.hakka.gov.tw/）